

もくじ

ルドルフ・レーマンに会う旅① 日比谷健次郎の京都滞在… P1
集められた庚申塔… P3

足立史談

第651号

2022年5月15日
足立区立郷土博物館内
足立史談編集局
〒120-0001
東京都足立区大谷田5-20-1
TEL 03-3620-9393
FAX 03-5697-6562



日比谷健次郎が宿泊した旅籠「美濃徳」があった京都市三条通りの京阪三条駅の一角
(日比谷二郎氏撮影)

1 日本史上初の辞書発行

史上初の和独辞書は、足立の人、日比谷健次郎と、現三郷市の健次郎の義父、加藤翠溪(すいけい)が発行人です。辞書の名前は『和獨対譯字林』(わどくたいやくじりん・日比谷家蔵。下写真)。

ルドルフ・レーマンに会う旅① — 日比谷健次郎の京都滞在 —

郷土博物館

真)、明治10年(1877)の出版で、先行研究によつて、日本初の和独辞書として評価されています※1。健次郎は戊辰戦争から間もない明治7年(1874)に妻の順(晁とも)と和独辞書の発行準備をはじめました。何もかも初めてのこと、

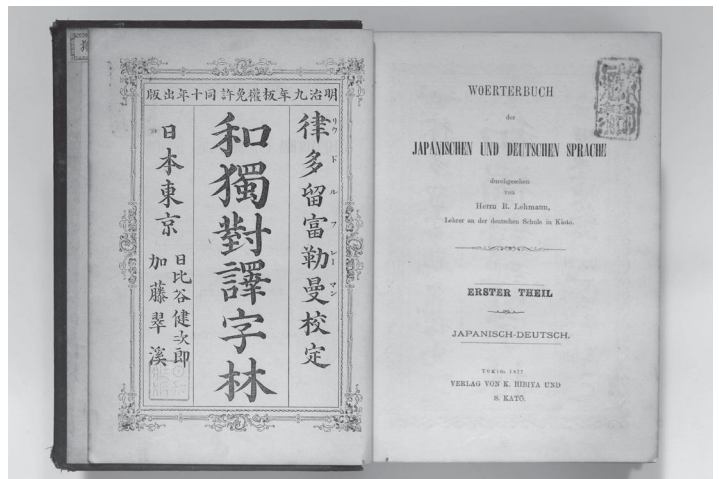
試行錯誤を重ねます。難関の一つがドイツ語の校訂者を見つけることでした。

明治7年7月、健次郎は西洋文化の拠点、京都へ、翠溪と旅立ちます。そのとき、滞在したのが、京都三条橋東詰め(現京都市東山区大橋町と

周辺)の旅籠「美濃徳」でした。

「美濃徳」の周辺は旅籠が集まっているところ。現在の京阪三条駅あたりです(上掲写真)。健次郎と翠溪は、ここを拠点として和独辞書の校訂者となるドイツ人を探しました※2。

探し当てたのは明治3年(1870)から京都府に招かれ欧学社独逸学校でドイツ語教育者として活躍していたルドルフ・レーマン(1842~1914)でした。レーマンは「ドイツ語教育の始祖」と称されるほか、現在の京都薬科大学(京都市山科区御陵中内町)の基礎を築いた人物として顕彰されています。



集められた庚申塔
 — 庚申塔の旧在地 —
 関口 崇史



【写真1】三十番神七面大明神社境内の庚申塔全景 左から① ② ③

足立二一八所在の三十番神七面大明神社（以下「三十番神社」と表記）には三基の庚申塔が並んでい

る。左より文久二年（一八六二）「庚申塔①」、享保七年（一七二二）、以下「庚申塔②」、享保十年（一七二五）、以下「庚申塔③」に造立された庚申塔である。

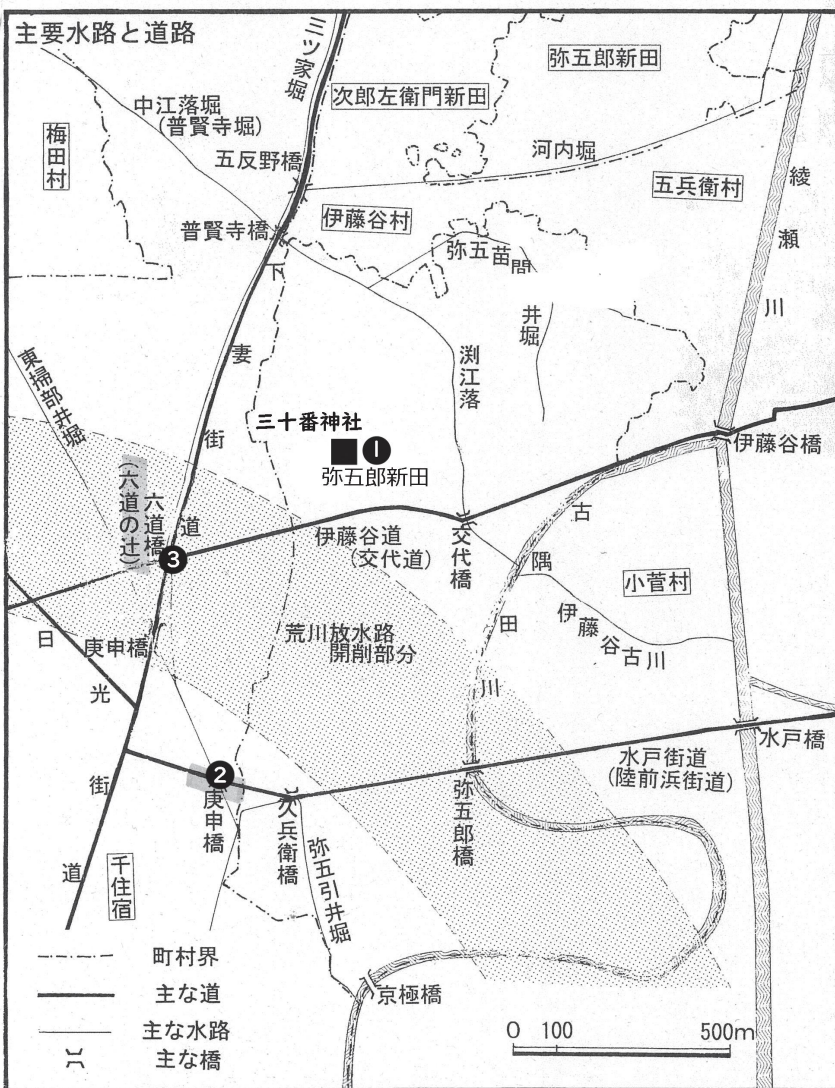
■集められた庚申塔 三基の庚申塔は三十番神社に造立されたものではない。これらは三十番神社近辺から集められた庚申塔なのである。しかも、三基の庚申塔はいずれも旧在

も、三基の庚申塔はいずれも旧在

地がわかつている。【図1 庚申塔の旧所在地】参照。①は足立三郵便局（足立三一八―一六）の所から、②は水戸街道と東掃部宿堀（千住堀の分流）が交差する庚申橋のもと（現千住五丁目）から、③は現在、荒川放水路中となつてしまつた六道の辻から移されたものである（藤田正二「庚申塔」本誌三七号、鴨下喜助「旧綾瀬村を訪ねて」本誌五一号、『足立風土記稿』地区編六 綾瀬参照）。

■村に跨る庚申塔 このうち、③の庚申塔に注目したのが瀧善成氏であった。

同塔の両側面の銘文から造立に、掃部宿・千住宿壱町目・同二町目・同三町目・同四町目・同五町目の大師講、屋中村、五兵衛新田、伊藤谷村、加兵衛新田、蒲原村、北山谷村、弥五郎新田、六木新田、佐野新田、普賢寺村、大谷田村、長右衛門新田という広範囲の



【図1】庚申塔の旧所在地
 （『足立風土記稿 地区編六 綾瀬』より転載加筆）

村々が関与していることに注目された瀧氏は「他の庚申塔造立の諸講とちがった目的構成が推考されてもよいのではないか」(「本区庚申関係石造物の調査」(下)『足立区文化財調査報告書』No.7、一九七三年)と一般的な延命信仰に基づく庚申塔造立とは異なる目的の存在を想定されたのである。

■庚申塔と道 ③の庚申塔造立に関与した村々はどのような関係にあったのだろうか。これを解く鍵が本来の所在地である六道の辻である。

鴨下喜助氏によれば、荒川放水路中の六道の辻は、旧綾瀬村弥五郎新田に位置し、「同地域の東南には水戸街道があり、さらに千住大橋から北に伸びる奥州街道・日光街道・下妻街道などが縦横に走って」おり、「これらの表街道・裏街道が走る地点を、俗に「六道の辻」と呼び、この辻に、

千住堀の分流が東南に走り、「六道橋」が架っていた。この分流が水戸街道をくぐる所に」③の庚申塔があった、そして、その周辺が祖父の所有地であったことから、「鴨下家の地守り」である三十番神社の境内に移設されたのだという(鴨下氏前掲書)。

これらの村々は、六道の辻で交わる下妻街道、水戸街道、伊藤谷道に連なる村であり、まさに「村を結ぶ」庚申塔なのである。

■願主 三右衛門 それでは、この数多くの村々を一つの庚申塔に結び付けたのは誰であろうか。同塔の銘文は摩滅している部分も多いため全てを判読することは困難であるが、前述の掃部宿及び千住宿全域の大師講や念仏講、同行約三〇名の関与が確認できる。そして、唯一の個人名が「願主 三右衛門」である。現時点で三右衛門の出自については不明

だが、これだけの村々に呼びかけることが可能なことから、地域の有力者との推定は可能であろう。また、③の三年前の享保七年に造立された②の庚申塔は、同行二二人によって造立され、その中心人物が三右衛門と喜左衛門であった。

庚申塔②は、もとは水戸街道に架る庚申橋のたもとにあったもので、こちら道(橋)にゆかりある庚申塔であった。六道の辻と庚申橋の地理関係と造立時期から②③の三右衛門は同一人物と思われる。三右衛門の庚申塔造立に道(橋)が強く意識されていたことがうかがえる。そして、③の庚申塔について瀧氏が本来の庚申信仰を離れ、より「現実的な意図を考えるのは冒涇であろうか」(瀧氏前掲書)と指摘されたのも首肯できよう。

足立区は江戸時代、庚申信仰が盛

んな地域であり、数多くの庚申塔が現存している。それらの中には、道標を兼ねる庚申塔、複数の「庚申橋」とそのたもと庚申塔は、庚申信仰と道・橋との結びつきがうかがえ、この意識が広範囲の村々を結びつけ、③の庚申塔の造立となったのではないだろうか。

■記録された「記憶」 近代以降の開発、区画整理のため造立地から移されてしまった庚申塔は少なくない。庚申塔の造立地には、そこに造立する理由があつたはずであり、その場所が不明なのは庚申信仰の理解を妨げてしまう要因となるであろう。幸運なことに、三十番神社の庚申塔の場合、藤田・鴨下両氏とその旧在地に關する情報を個人の記憶に留めず、足立史談に記録として遺してくれたことが、造立地を踏まえた今回の考察を可能としてくれたのである。

(足立区文化財調査員)



【写真2】庚申塔③
享保10年(1725)



【写真3】庚申塔②
享保7年(1722)